

2.5. 病理診断科 臨床研修プログラム (選択)

1. 到達目標

病理学的検査を有効に利用できる医師となるために、病理診断学の概要を理解し、病理検体の適切な取扱い方を習得するとともに、病理学的検査の適応とその限界を理解する。さらに、各科の医師やその他のメディカルスタッフとの良好なコミュニケーションに心がける。また、将来病理専門医を目指す医師にはその第一ステップとして病理診断学を研修する。

- 1) 病理組織診断と細胞診の違いを説明できる。
- 2) 病理標本の作製手順を列記できる。
- 3) 各種特殊染色および免疫染色の目的を説明できる。
- 4) 病変の肉眼的所見を記述できる。
- 5) 各臓器の正常組織像を識別できる。
- 6) 基本的な病理組織学的所見を抽出できる。
- 7) 確定診断のために必要な追加染色および確認すべき臨床情報を提示できる。
- 8) 病理診断に基づいて治療方針を立案できる。
- 9) 主治医に必要な臨床情報を照会する。
- 10) 各科との臨床病理検討会に積極的に参加する。
- 11) 手術検体の撮影、張り付け、ホルマリン固定が適切にできる。
- 12) 癌取扱い規約に準じた各臓器の切り出しができる。
- 13) 病理解剖にかかわる法令（死体解剖保存法など）を理解する。
- 14) 病理解剖の介助や記録ができる。

2. 研修期間 4週～40週

3. プログラム指導者と参加施設

プログラム指導者 病理診断センター 山田 鉄也
基幹病院 中部国際医療センター

4. 方略

ローテート開始前に指導医と面談し、各々のニーズに対応した研修目標および研修期間を設定する。

- ① 小講義形式にて病理診断学の基本的事項を学ぶ。
- ② 臨床検査技師・細胞検査士および上級医・指導医の説明の下、病理標本作製の手順を理解し、包埋・薄切・染色などを体験する。
- ③ 手術材料をもとに、検体の取扱い方、肉眼所見の取り方、切出し方法を学ぶ。
- ④ 病理標本をもとに、病理組織学的所見の取り方や診断に至るまでの思考過程を学ぶ。また、病理診断報告書の作成にも携わる。
- ⑤ 病理解剖の意義を理解し、法令（死体解剖保存法など）にしたがって必要な法的処理を行い、遺体に対しては礼を失すことなく丁重に取り扱う。その上で病理解剖に立ち会い、上級医・指導医の下で第一助手として剖検介助をしながら、解剖手技や肉眼所見の取り方を学ぶ。また、剖検録の記載をする。
- ⑥ CPC や各科との合同検討会（カンファランス）に出席して、積極的に討論に参加する。

5. 評価

研修中にフィードバックを繰り返し、形成的評価を行う。

6. 週間スケジュール

	月	火	水	木	金
午前	Morning Report 臓器切出し 病理組織診断				
午後	病理組織診断 細胞診	病理組織診断 細胞診	病理組織診断 細胞診	病理組織診断 細胞診	病理組織診断 細胞診
夕方	カンファレンス	カンファレンス	カンファレンス	カンファレンス	カンファレンス

- ・初日はオリエンテーションを行う。
- ・病理検査室における業務と病理関連スタッフについて
 - 病理検体の取り扱い
 - 病理組織標本作製の流れ
- ・病理におけるバイオハザードや廃棄物適正処理に関する基礎知識
- ・病理診断にかかる診療報酬と経費
- ・病理における守秘義務とプライバシーへの配慮
- ・不定期に術中迅速診断や病理解剖が行われる。